このミニブックは「身延町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中で作成したものです。

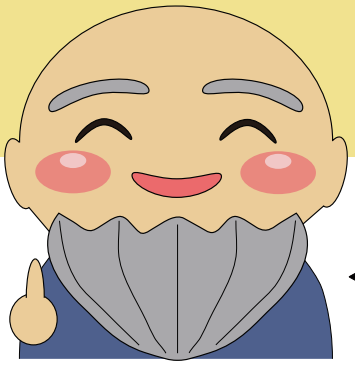
教えて♪ もくじい。シリーズ④

山梨県指定文化財

旧市川家住宅と昔のくらし

旧市川家住宅は、富士川の東岸の身延町和田平に位置する大型民家で代々大庄屋、交替名主を務めた家柄です。棟札(右写真参照※)から享和3年(1803)に建てられた事がわかっています。北側の土蔵とともに、当時の面影を残しています。

※棟札：お寺や神社、民家などの建築や修理の記録、記念として棟木や梁など建物内の高い場所に取り付けた札。

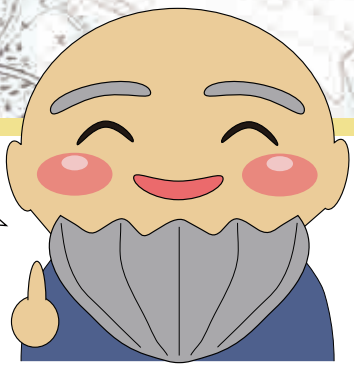


棟札から建てられた年代のわかる貴重な建造物として、県の指定をを受けた文化財なんじゃ。

←もくじい。は、身延町立木喰の里微笑館のオリジナルキャラクター

Q：旧市川家住宅ってどこにあるの？

身延駅の南、県道10号(富士川身延線)から少し入った場所にあるんじゃ。裏山の高台には、戦国時代に狼煙台があって、市川家のご先祖はその管理を任されておったそうな。家の前には富士川が流れておるが、江戸時代には北岸の大野との間に渡船があり、角打⇔大野との渡船とともに身延参詣のお客でにぎわっていたそうじゃ。



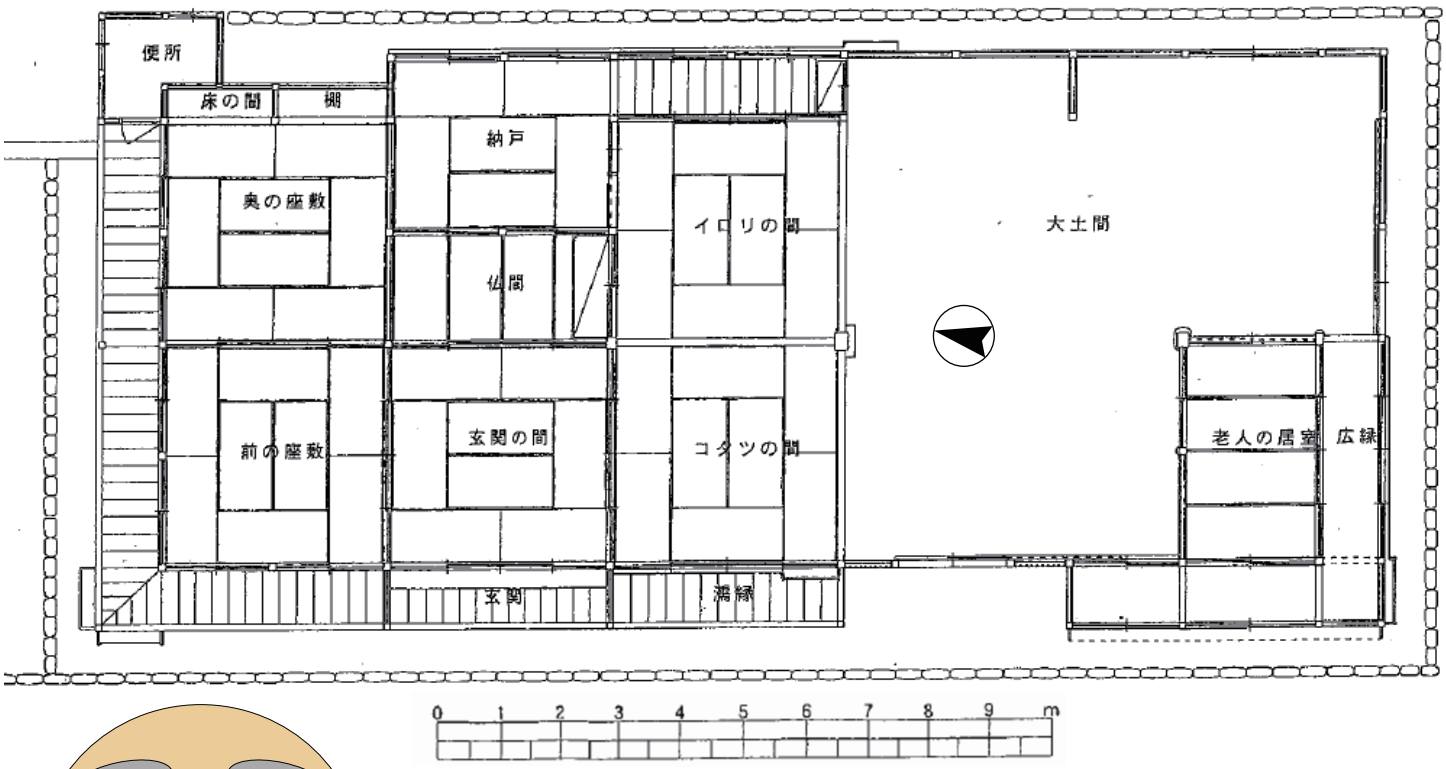
Q：屋内はどんな風になっているの？

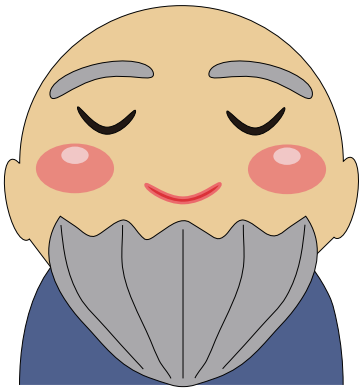
A：市川家は6間取り（前後に6室並ぶ型式）の和室と、床の40%に相当する広い土間をもち、縁側も取り付けられています。土間に出入りする、西面と南面に大戸が引き込まれており、客を迎える玄関には式台が設けられています。北側の２室のお座敷は特別な客をもてなす部屋で、狆潜り(※)付きの床の間や筬欄間を用いた格式の高い造りになっており、天井も棹縁天井が張られています。西側３室の襖を取り外すと大広間になり、昔は村の寄合や冠婚葬祭の場として利用されたと伝わります。

※床の間の脇を仕切る壁の下に開けられた吹きぬけ。狆は犬の種類。

西面の大戸

筬欄間





今は再現されておらんが、昔はイロリももあったんじゃのう･･･。市川家に伝わる家相図には北側にお風呂も描かれておるぞ。

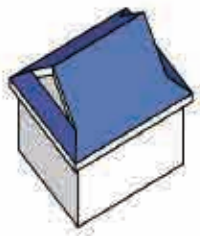
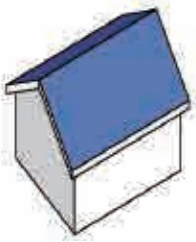
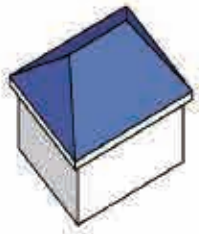
※家相図：間取りや方位などから吉凶を判断するために描かれた家屋全体の平面図のこと。

昔の屋根は機能的！？

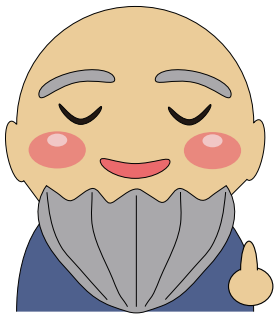
茅葺(かやぶ)き屋根の家は、夏は涼しく冬は暖かいという素晴らしい特徴を持っています。現代の材料と技術をもってしても茅葺きの持つ吸音性(きゅうおんせい)・断熱性(だんねつせい)・保温性(ほおんせい)・通気性(つうきせい)を兼ねそなえた屋根をつくりあげることは簡単ではありません。最大の弱点は火事に弱いことです。屋根の頂上には「水」の文字が刻まれていますがこれは火事を防ぐ祈りを込め水神(すいじん)を意味しています。また、反対側の同じ場所には縁起文字(えんぎもじ)の「壽(ことぶき)」が刻まれています。

解いてみよう！

古民家の屋根の形を線で結びつけてみよう！

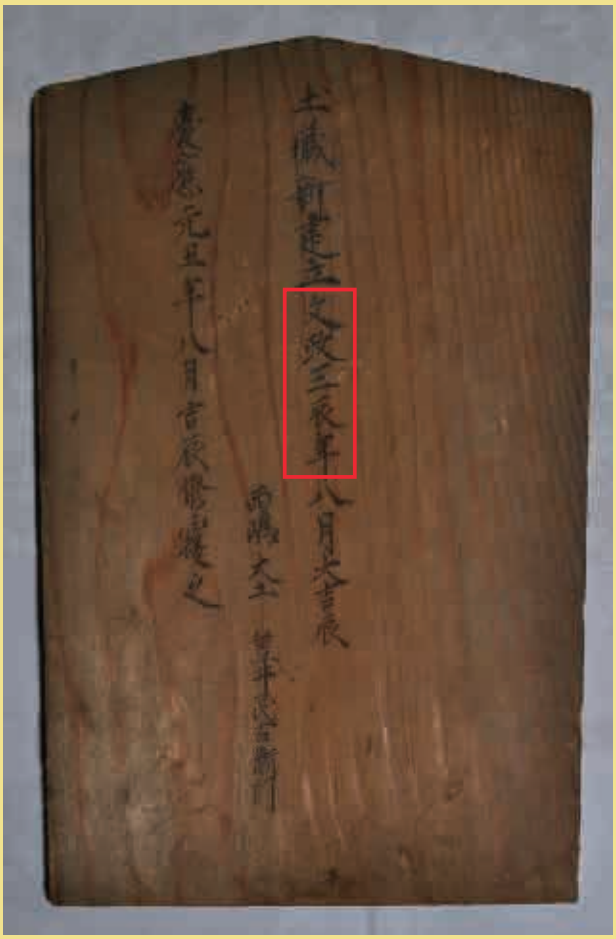
屋根の名前	屋根の絵
切妻造(きりつまづくり)	
寄棟造(よせむねづくり)	
入母屋造(いりもやづくり)	

市川家の屋根は入母屋造じゃが、武士のかぶとにも似た形から「かぶと造」とも呼ばれておる。かぶと造は明かりが入りやすく、二階の空間利用に有効なんじゃ。江戸時代の中期から明治時代にかけて盛んに行われた養蚕業(ようさんぎょう)とともに、東日本各地に流行した屋根の形なんじゃよ。



大切なものは土蔵の中へ！！

土蔵の役割は何よりも防火で扉や窓も厚い土戸で塞ぐなど、中に火が入らないような構造になっています。真っ白な漆喰の壁は耐水性、耐火性に優れるだけでなく、夏の強い日差しを反射する働きがあるため、室温を一定に保つことができます。市川家の土蔵は、１階に米や味噌を貯蔵し、２階は衣類や家財道具の収納に使われました。

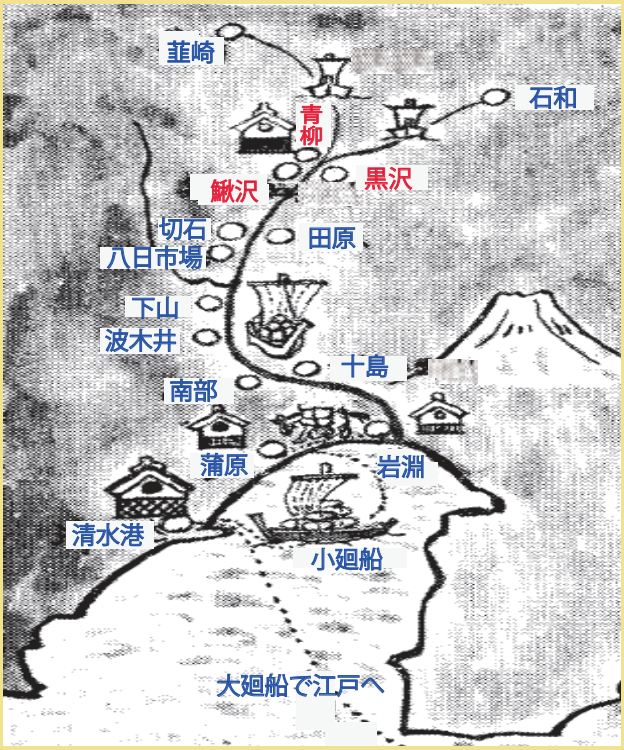


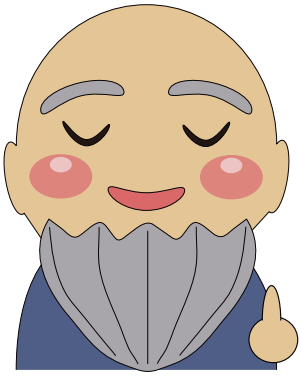
なお市川家の土蔵は、棟札から文政３年(1820)に建てられたことが分かります。

土蔵は江戸時代、八代将軍吉宗の享保の改革以後、各地で建築が奨励されたんじゃ。江戸の町など火事の多い都市に集中的に建てることで防火の楯にしようと試みたんじゃのう･･･。とはいえ、高価な土蔵を建てられたのは一部の者で庶民は穴蔵と呼ばれる板張りの地下室をつくって、自分の財産を守ったそうじゃ。

民話「市川家の鼻黒舟(はなぐろぶね)」

昔むかし、舟大工たちが富士川の川の岸で、舟を造っていたそうです。しかし、寒さで造るのに苦労していました。そこへ通りかかった市川家の家主が気の毒に思い、「わが家の土間を使ってくれ」と言い、舟大工は喜んでそこに移り、舟を仕上げたそうです。ところが何のはずみか、舟の先端へとかまどの炭をべっとりとつけてしまい、さあ大変だと一同は途方に暮れていました。そこへ役人がやってきて話を聞き、家主の計らいに心をうたれ「心配いらぬ。この辺りの舟の先端は全て真っ黒に塗らせるから」と言ってくれたそうです。それ以後、富士川東岸にかかる舟はすべて先端を黒く塗って「鼻黒舟」と呼ぶようになったそうです。

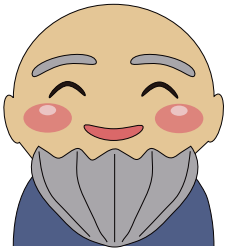




江戸時代の中頃、甲府城主の柳沢氏が大和郡山へ移った後、甲斐の国は幕府が直接治める地域になったんじゃ。江戸城へ届ける年貢米は富士川を舟で運ばれたんじゃが、「鰍沢」・「青柳」・「黒沢」は舟運の拠点として甲州三河岸と呼ばれておった。黒沢河岸は主に石和代官所の支配地(郡内地方)からの年貢米を扱っておって、それを運ぶ舟は富士川東岸の村々から出ておった。その舟はと他の河岸舟と識別するために、舳先を黒く塗っておったんじゃ。市川家の民話と関係があるのか興味深いところじゃのう・・・。

昔の道具を調べよう①

旧市川家住宅には昔実際に使われていたいろいろな道具が約600点展示されているんじゃ。ここからは主なものを、いくつか紹介しようかのう。



■ 唐箕（とうみ）

臼（うす）などで籾殻（もみがら）を外したあと、風力を起こして穀物（こくもつ）を籾殻・玄米（げんまい）・塵（ちり）などに選別する道具。
ハンドルで中の羽を回し、上から玄米などを落とすと、重い玄米は真下の口、軽い玄米は外側の口、籾殻や塵は側面の口からそれぞれ出てくる。
中国で開発されたと言われ、日本では江戸時代の中頃(今から約300年前)から使われている。
写真は昭和10年頃の唐箕。

■ 火のし

内部に炭火を入れて、その熱と容器の重みで服のしわを伸ばしたり、ひだをつけたりするための道具。
冬は寝具（しんぐ）を温める用途もあったという。
写真は江戸時代の火のし。

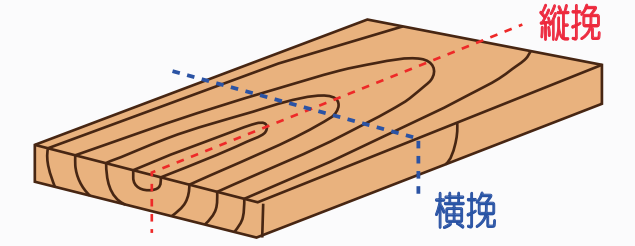
■ もじり

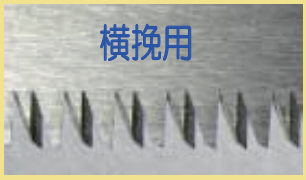
富士川でアユやウナギを獲る漁具（りょうぐ）。
筒状（つつじょう）の竹籠（たけかご）に円錐状（えんすいじょう）の竹籠を差し込み、魚が入ると出られない仕組みになっている。
写真のもじりの長さは70㎝程。大きいものでは7mを超える仕掛けもあり、漁の最盛期であった幕末（ばくまつ）には、船の通行の妨げになる事もあったため、市川代官所（いちかわだいかんしょ）から日中の仕掛けを禁止する通達（つうたつ）が出された。

昔の道具を知ろう②

■ 縦挽用のノコギリ

木材を木目に対して平行に切断するための鋸。木目に対し直角または交差して切断する横挽用とは刃先の形が異なる。



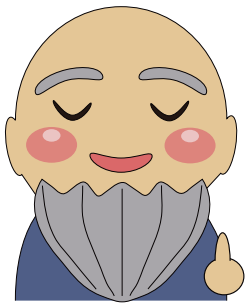


■ 弓張提灯

竹を弓のようにまげ、その上下にひっかけて張り開くようにした提灯。置く・掛ける・手にもつなど色々な使い方ができる。市川家の家紋である「九陽の星紋」と屋号が書かれている。

■ 繭の毛羽取機

養蚕の道具。ハンドルを回してゴムベルトを動かし、その上を通した繭の毛羽をとる。毛羽は蚕が繭を作るときの足場糸(下写真のまわりのふわふわした糸)で繭どおしが絡まないように、取りのぞいてから出荷した。



旧市川家住宅は身延町の昔の暮らしを知る教材がたくさんあるんじゃ。みんなにもぜひ一度訪れてほしいのう。

お問合せ先：身延町教育委員会　生涯学習課　文化財担当
住所　身延町常葉1025　電話　0556-20-3017

発行年月日：令和3年6月1日